

日本ディスエイブルパ ワーリフティング連盟

全日本障害者パワーリフティング 選手権大会 報告；JDPF事務局、吉田寿子 写真；JDPF理事長、吉田進

パラリンピックに一人でも多くの選手を送り込むこと、これは、日本ディスエイブルパワーリフティング連盟の最大の目標です。そのために、合宿、海外優秀コーチの招へい、選手の海外派遣、など、様々な活動をして、少しでも日本選手の競技力向上を図ろうと、しています。

この大会では、韓国から優勝コーチと選手を招へいし、一緒に全日本を戦いながら、韓国から競技力向上のヒントを得ようとしていました。ところが、大会二週間前、世界ベンチに参加するために、アメリカのダラスの空港に着き、ターンテーブルの前で、預けたトランクが出てくるのを待っていたときに、韓国障害者パワーリフティング連盟の事務局から電話が入りました。てっきり、日本に着く時間を知らせてくれるものと、メモを取り出して、話を聞いてみると、今年の日本遠征は、韓国の内部事情のために中止します、と、言うのです。

絶句！

スポーツ協会からは政府補助金をいただき、この招へい事業計画を立てていたのですが、どうしましょう、まず、お金は返金して、そして、全日本大会は日本人だけで開催し、韓国コーチのセミナーを受けるために借りていた会議室は、急遽、審判講習会にしよう、など、予想外の韓国からの連絡に、頭の中で次の対策を考えます。

結局、スポーツ協会からのアドバイスで、海外の連盟では、時々、同じような事があるので、他のチームを招へいするなど、お金は返金しないで、事業をしてください、ということで、新たな課題を抱えることになりました。

大会前日。

健常者の大会には、ない制度ですが、障害者の大会には、「クラス分け」が欠かせません。このクラス分け、というのは、障害の程度のクラス分け、という意味ですが、パワーリフティングの場合は、障害の程度によるクラスはないので、下肢切断の

選手も、脊髄損傷の選手も、神経の麻痺する筋ジスの選手も、ポリオの選手、そのほかの下肢に障害を持つ選手は全員が同じクラスで、区分は体重だけです。

ですが、最低限、障害者大会に出られるか、逆に障害が重すぎて、パワーリフティングの試合に出るのは危険ではないか、と、いう二つの観点から、クラス分けが必要です。

今年の1月に、このクラス分けの国内資格を取得した兵庫県の古城ドクターと茨城県の向井理学療法士に来ていただき、新しい選手のクラス分けをしていただきました。

このクラス分けですが、切断の選手や脊髄損傷の選手は一度クラス分けを受けると、一生、パラリンピックパワーリフティングの参加資格が有効となりますが、進行性の筋委縮症などの病気を抱える選手は、試合のたびに、クラス分けを受けなければなりません。そのため、海外にまで遠征したのに、試合に出られない場合もでてきてしまいます。

女子44kg級では、シャルコマリーツース氏病という難病を抱えながらも、パワーリフティングに取り組み、病気の進行を抑えながら、しかも、回復の傾向さえ見せ、記録自体も年々伸ばしている小林選手が62.5kgをマークして優勝。7月の世界選手権に向けて好スタートを切りました。小林選手は大会ごとにクラス分けを受けなければならない選手の一人で、課題は、シャフトがしっかりと握れること。ベンチプレスは手のひらにシャフトを乗せるだけでバーを押せますが、パラリンピック委員会では、危険防止のために、シャフトをしっかりと握れること、を要求します。それで、ベンチプレスの練習とともに、握力が衰えないという練習もしなければならず、練習は、週5日長時間に及ぶようです。医者からは、小林選手の回復が信じられない、という目で見られるそうですが、その、回復をさせているのが、中ノ瀬コーチの丁寧な指導と工夫です。

同じ病気の妹さんの大津選手が初めて全日本に出てきました。今回は、厳しいルールもあり、47.5kgにとどまりましたが、初めてまだ3ヵ月余りで、55kgを押すそうで、筋肉的に、小林・大津姉妹は相当優れたものを持っているようです。

二人の選手の活躍と、回復を、見守っていきたい、と、思っています。

男子の部の今回の大きな課題は、あと一人、世界選手権に参加する選手を選ぶことです。世界選手権には、厳しい標準記録があり、今のところ、これを突破しているのは、女子の小林選手、男子では、75kg級の宇城選手、82.5kg級の大堂選手、100kg級の中辻選手です。このうち宇城選手が世界選手権に参加しないので、男子は、二人しか派遣できません。救済処置として、一人だけは、標準に達していなくても、選手を送れる、というルールがあり、この一人をどのように選考するか、前日の理事会で、話し合いました。

パラリンピックに参加できるかどうかは、選手にとってはとても大きな問題です。そのため、しばしば、オリンピックでも、パラリンピックでも、参加できなかった選手が裁判を起こす、という事態が時々発生します。どうしたら、公平に「選手選考」ができるか、は、どのスポーツ種目でも大きな課題となります。

もちろん、だれかが、標準記録を突破したら、その選手が選ばれます。

もし、だれも、標準が突破できなかったら、あと、一人、どのように選考するか？



会場全景

フォーミュラで決めるか？――実は、これは、絶対的な数字ではなく、健常者のパワーリフティングの選手の体重とトータル記録とを出来るだけ沢山、グラフ上に点で示し、大体の傾向をコンピューターで式化して出来上がった数字です。ですので、IPFでもシングルベンチのフォーミュラとパワー三種目のトータルのフォーミュラが同じはずはないのではないか、という、疑問も出てきています。また、パラリンピック委員会パワーリフティングでは、フォーミュラと言う概念はありません。ですので、この健常者のフォーミュラを障害者ベンチに当てはめるのは正しい判断と言えるだろうか、という、疑問があります。もし、裁判になった時、このフォーミュラで根拠が正しいと裁判所に判断されるだろうか、という、疑問も出てきます。

散々議論した結果、パラリンピックやアジアパラ、では、何よりも順位が重視されます。順位は、健常者以上にシビアで、パラリンピックで上位8位以内に入った選手が何人いるか、3位以内に入る選手は何人か、世界大会での入賞率はどうか、などが、点数化されていて、これによって、日本政府から出される補助金の割り当てが決まってきます。障害者団体で最低は30万円。最高は1千万単位。私達JDPFは本年度は130万円です。この130万円で世界選手権派遣費や宿泊費を出すのですが、この額では、交通費とIPC登録費がせいぜいで、結局宿泊費だけは自前で出してもらうことになってしまいます。

こういうことから、世界でどれくらいの位置にいるか、ということで、選手の選考をし、世界ランキングが同じ場合だけ、健常者の使っているフォーミュラを使おう、ということになりました。

男子48kg級では、松本選手が体重45kgで95kgをマークし優勝しました。体重の2倍以上を挙げ、素晴らしい記録です。2位には高田選手が、50kgで入りました。

男子52kg級は田中選手が65kgで優勝。

男子56kg級では、三浦選手が115kgで優勝、岡田選手が110kgで2位、3位には片桐選手が65kgを挙げて入りました。。

男子60kg級では、柳沢選手が気合いの入った試技で、90kgの自己ベストをマークして優勝。

67.5kg級は、接戦で、優勝は韓国の来日を楽しみにしていた山田選手が105kgで勝ち、村井選手が逆転に失敗して100kgで2位、3位は今回初めて出場してきた山口県の伊藤選手が87.5kgを挙げて入りました。また、若干20歳の兵庫県の

池口選手は初出場で65kgを挙げて4位となりました。

75kg級では宇城選手が177.5kgをマーク。ロンドンパラへの足がかりとしました。佐野選手は、自己ベストの147.5kgに失敗したものの、アジア大会の標準を突破し、アジアパラリンピックの選考待ちとなっています。

82.5kg級では、大堂選手が192.5kgの日本新記録をマーク。200kgは惜しくも失敗でしたが、200kgの大会に乗るのは時間の問題かもしれません。また、昨年初めて参戦してきた中村選手が115kgをマークして2位に張りました。

100kg級では中辻選手が200kgの大会を出すかと期待されたが、今回は、180kgまでを軽く持ち、7月の世界選手権で、記録を狙って来るようです。

100kg以上級では、竹田選手が日本記録157.5kgをマークしました。

会場の関係で、月曜に大会をせざるを得なかったが、平日にも関わらず、審判として兵庫県から参加くださった審判の先生たち、補助や進行をしてくださったパワーハウスの皆さんに心の底から感謝申し上げます。スタッフの皆さんがいてくださらないと試合は成り立ちません。大会が実施できたこと、心の底から、ご協力を頂きました皆様に感謝申し上げます。



上；女子最優秀の小林選手

左；アテネ日本代表宇城選手